

美郷町の
研究施設

ウナギの行動分析

2月7日 富田 日大など 発信機で追跡

謎が多いニホンウナギの生態解明につなげようと、美郷町南郷のウナギ研究施設「国際うなぎラボ」で、同施設と日本大、京都大による共同調査が始まった。川から水を引き、自然に近づけた人工池に発信機を付けたウナギを放し、昼夜や季節ごとの行動パターンを細かく追跡する。

ウナギ博士として知られ、同施設所長も務める日本大の塚本勝巳教授(66)が中心となり、超音波発信機を使った魚類の行動調査のノウハウを持つ京都大の荒井修亮教授(58)が技術支援する。約1700平方メートルの池の四隅と中央に取り付けた発信機で発信機の信号を捉え、ウナギの活動時間

や範囲などの行動パターンを読み解くという。期間は1年間。

調査は6日に始まり、7日は両教授ら大学関係者6人が、日向市の耳川で捕獲したニホンウナギ4匹の腹部に直径9ミリ、長さ28ミリの発信機を埋め込み、実験池に放流。機器の動作確認などをした。塚本教授は「どんな結果が得られるか楽しみ。行動パターンが分かれば、資源保護と運動した河川工事なども可能になる」と話した。

国際うなぎラボは河川環境保護などに取り組む富郷市のNPO法人「ゼーフレイ・ライフ&リバー」が2013年に開設した。



ウナギに発信機を埋め込む調査チームの研究者1日前、美郷町南郷区の国際うなぎラボ実験池